教職科目Ａ，初等生活科教育法
担当教員：福田　喜彦

初等生活科教育法におけるＦＤ活動への取り組み

社会科教育講座・福田　喜彦

１．授業の目的と達成度

本授業は，生活科の性格，目標と内容，授業構成の仕方，指導計画と評価の方法などについて理解すると共に，体験的な実習を通して生活科授業における実践上の諸問題や指導上の留意点について把握することを目的としている。

本授業では，シラバスのもとに，「生活科教育の意義」「生活科教育の歴史」「生活科の性格と目標」「生活科の内容構成」「生活科の学習方法」「生活科の授業構成」「生活科の学習指導計画の作成」「生活科の学習指導」「生活科の評価」の９つのテーマを中心に講義を進めた。本授業での到達目標は，①小学校生活科授業を分析，説明することができる，②小学校生活科授業の実践上の諸問題について，自分の考えをまとめ，論述できる，③学習支援案の立案を行いながら授業を創造，改善していくことができるの３点をめざした。

本授業では，生活科の授業について学生ができるだけイメージしながら，受講できるように資料をもとしながら解説を行った。以下は最終レポートに寄せた学生の一文である。

「今回，学習指導案を作ってみて，いかに学習指導案を作る（考える）ことが大変かということがわかった。他の講義で「指導案」を作るということをしたことがあるのだが，その時の「指導案作り」は何を教えるか（単元は何か）ということが決められていて，しかも１時間分の授業についてその時間の目標と学習の流れを各自で考えていく，というものであった。（中略）今回はテーマ（単元設定）の段階から自分で決めて作っていくというものでだったので，どんな単元にしたらいいのか，その理由は，どのような学習の流れにするのか，評価の観点は，など様々なことを決めていかなければならず，難しかった」

本授業の内容を理解した上で，生活科の学習指導案を作るというレポートは学生にとって難しく感じたようである。しかし，そのレポート作成の中で生活科の授業について多角的・多面的に考察しながら，子どもたちが楽しんで取り組める授業にするためにはどのような教材を使ったらよいのか，あるいは授業の構成はどのようにしたらよいのか，一生懸命に考えてくれたレポートが多かったのが全体的なレポートへの講評である。

２．体験的活動を生かした授業への試み

本授業では，実地講師担当の授業の中で，いきものを題材にした教材とおもちゃづくりを題材にした教材の２つを実際に学生に体験してもらった。「いきもの」実践では，講義室の裏にある庭園でダンゴムシを見つけてもらい，講師の配布した「あのねカード」にダンゴムシの観察記録を作成してもらった。「おもちゃづくり」実践では，附属小学校の生活科授業の様子を話していただいた後，自分たちで用意してきた素材を使っておもちゃを製作してもらった。いづれの授業も熱心に学生は受講していた。以下は，アンケートによる複数の学生の意見をまとめたものである。

「講師の方は１つずつのグループを見て回り，「これはいいねえ」などと声かけし，また写真を撮りながらにこにこされていました。こっちまで楽しくなり，生活科の授業は子どもがのびのびするのはもちろん，教師ものびのびするのが必要なんだなあと感じました」「身近なテーマから様々なことが学べる，それが生活科なんだということを感じた。また教師と子ども，子どもと子どものように人のつながりが学べるものであるということを学びました」「教師は多角的な視点で子どもを見ていくことが大切だと思った。子どもにとって，「楽しみだなわくわくするな」と思うような授業がいいなと思った」「生活科は子どもが主体的に参加できるということに意義があるのだということがわかりました。それには教師が環境を整えてあげることが必要であり，子どものやる気を引き出し，楽しめるように工夫することが求められるのだと知りました」「ダンゴムシの観察では，友だちに協力してもらったり，見せあいこをして，おもちゃづくりでは共同制作，道具の借しあいこをするなど，他の教科に比べ，子どもが

主体的に動き友だちと関わっていく機会が多いのが生活科という教科であるように感じました」「体験を通して学ぶことの大切さを改めて感じた。体全体で感じることで頭に残りやすい。また教師からの指示は最小限にとどめるべきだと思った」

上記の学生の意見からは，体験的な授業を通して，生活科の授業が持つ意味を実感することができたことを読み取ることができる。その後，授業では，これらの体験が持つ意味を生活科の学習指導要領や歴史的背景から読み解いていった。

３．学生の授業への意見と改善に向けた視点

本授業の最終回に，「初等生活科教育法」の授業に関して，本授業で良かった点，改善してほしい点についてアンケートに答えてもらった。以下は，複数の学生からの意見をまとめたものである。「資料が事前に配られすぎて不便。しかもすごく見づらいです。またずっと話しているだけなので取り組みづらく，教室の雰囲気も眠たい感じなっていたり，私語が当たり前になっているように感じました。真剣に授業を聞こうとしても困難な雰囲気は，個人では直せないのでもっと空気を引き締めていただきたかったです」「生活科についての知識を得ることができてよかったです。もう少し，ディベートのようなことをする機会があると良かったと思います」「プリントを配布するタイミングと授業進度をもう少し合わせてほしい。ただプリントを読むだけであれば自分でもできるので，大事な言葉を穴埋め式にするなどの工夫をしてほしい」「授業案が具体的に提示されていて，非常に分かりやすかった。しかし，プリントが見にくく，探すのに非常に苦労した」「５領域をそれぞれ詳しく学ぶことができたので，とても勉強になりました。実際に行われている生活科の授業のビデオを見てみたかったです」「生活科の学習指導要領を一人で作るというのはいきなり過ぎてすこしとまどってしまったので，グループで一つの指導要領を作るというものにして欲しかった」「ずっと先生が話している講義では，児童・生徒と同じで学生も飽きます。(単に甘えですが)視覚教材やパワーポイントなどで授業にメリハリをつけてはいかがですか。先生の経験なども聞いたりして今話をしていることに具体性をもたせたりすれば，もっと興味をもって講義を聞く学生が増えると思いました。(ほとんどの学生は少なからず教師を目指しているので)」

学生の意見では，プリントや資料が多く内容を詳しく説明してもらえてよかったといった意見が多く見られた。一方，講義中心の授業だった，資料の文字が見にくかった，プリントを適切な時期に配布してほしい，視聴覚教材の利用やグループワークなど学生の主体的な活動を取り入れて欲しいといった意見が多くみられた。

本授業では，シラバスの内容に沿って生活科の授業を様々な視点から解説するという部分と実地講師の体験的な活動を行う部分に分けて構成していたが，もっと学生による活動や発言を授業で活発にする必要性を改めて感じた。今回のアンケートでは，学生からの授業への意見は建設的なものが多く大変参考になった。

４．次年度への課題

公開授業後のカンファレンスでは，「学生の出席状況の把握をどのようにしているのか」「地図を学生に提示する際に，資料だけでなくパワーポイントなどを活用して視覚的に学生に提示した方が，学生の意識を集中させることができる」といった点について指摘を受けた。これらの意見は，学生からも寄せられていたので改善に取り組みたい。また，授業に集中していない学生も見受けられたのでこれらの学生への働きかけをどのようにするか，教職必修科目として授業担当者がどのように授業を進めていくかといった教科目の位置づけに関することなどについても意見も出された。また，本授業には，愛媛大学教育学部附属小学校６年部による「総合的な学習校外学習・親子ふれあい学習」の一環として，「見つけよう未来のなりたい自分」というテーマのもとで多くの児童や保護者が本授業を参観に来られた。授業後，児童から以下のお手紙をいただいた。

「先日は初等生活科教育法の講義を参観させていただきありがとうございました。資料も配付していただき，私たちも大学の講義の雰囲気を知ることができました。とてもよい経験になりました。また，１，２年生のころの授業の様子を思い出すことができました」

教員養成系の学部として学生の資質向上だけでなく，地域の方に向けても大学での授業の様子を公開することで，教員を目指している学生の様子や自分たちの受けている授業の意義を伝えることの一助になったのではないかと感じている。

最後に，本授業に対して様々な意見を寄せていただいた諸先生方をはじめ，受講してくれた学生諸君の意見をＦＤ活動の成果として取り入れ，さらなる授業力の向上に努めたいと考えている。